2023年7月16日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

息継ぎをしながら

［創世記2章4節（後半）～17節］

主なる神が地と天を造られたとき、地上にはまだ野の木も、野の草も生えていなかった。主なる神が地上に雨をお送りにならなかったからである。また土を耕す人もいなかった。

しかし、水が地下から湧き出て、土の面をすべて潤した。主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらすあらゆる木を地に生えいでさせ、また園の中央には、命の木と善悪の知識の木を生えいでさせられた。

エデンから一つの川が流れ出ていた。園を潤し、そこで分かれて、四つの川となっていた。第一の川の名はピションで、金を産出するハビラ地方全域を巡っていた。その金は良質であり、そこではまた、琥珀の類やラピス・ラズリも産出した。第二の川の名はギホンで、クシュ地方全域を巡っていた。第三の川の名はチグリスで、アシュルの東の方を流れており、第四の川はユーフラテスであった。

主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた。主なる神は人に命じて言われた。

「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」

[1] 「土」と「息」と

「創世記」の初めの部分を少し丁寧に読んでいます。何回かに区切りながらです。ちょっと珍しい貴重な機会だと思いますが、またご一緒に味わって行きたいと思います。今日の箇所は、2章の4節後半から17節までです。

ここには、神様が人を創造されたという出来事が、1章とは少し違った角度で表現されていると思います。1章の所では「神はご自分にかたどって人を創造された。男と女に創造された」（1:27）とありました。それは、神様は宇宙とこの世界、陸と海、動植物などを創造し、第六目、舞台を全て整えた所で、人間を造られたという記述になっていますが、今日の創世記2章ではそうではなく、まだ地に草も木もない時に、神様はまず人間をお造りになったという記述になっています。矛盾していると思われる方がいて当然でしょう。ただ、現代の聖書学からすると、これは1章・2章と一気に書かれたものというのではなく、2章4節以下の部分の方が先に書かれていて（前9世紀）、その部分はある意味、素朴な書き方です。そして1章の天地創造物語は、恐らくユダヤ人にとって最も大きな試練を経験したバビロン捕囚の時期に、神のダイナミックな創造の６日間を、安息日も含めて、神様に立ち帰る思いをもって記述したと言われます。文体もリズミカルです。聖書が出来上がってゆく歴史や構成というものは確かにあるでしょう。しかしそこには目的があります。「人間の創造」という点で、後の世代に残そうとした者がまず強調したかったこと、それは、人は「土」から形作られたということと、神様が息を吹き入れることによって生きる者となったという、人間存在の本質のことです。

創世記２：７。「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」。人（アダム）は、土（アダマ）を素材にして造られたのだ、神様によって、と言うのです。どう思われますか？これは、素晴しいことを言っているのです。「土くれ」と言いますが、土がないと人間は居ないですよね。土があるためには既にそこに歴史が有る筈です。光も水も必要、バクテリア、微生物、etc…、それこそ生き物のゆりかごが土だとも言えると思います。神様はその土・大地を祝福されて、そしてその土を用いて、神様の愛による最高の存在・人間を造られたのではないでしょうか。神様の手のわざです。あの、システィーナ礼拝堂のミケランジェロによる「天地創造」の「アダムの創造」の絵は有名ですよね。神様の指が、初めの人間アダムの指と繋がろうとしている絵です。あそこには、神様の思いがあると思います。そして「御自分にかたどって」という1章に書かれている人間の尊さが描かれていると思うし、また指を触れるような「近さ」も描かれていると思います。神様は私たちを“霊的な存在”としてだけでなく、体を有する者として造って下さいました。私たちは、時に体は厄介だと思うことがあると思いますけれども、神様がどれだけのご計画と愛を持って私たちに体を与えて下さったのか、いや、主の許に帰る日まで預けて下さったのか、そのことも静かに考えてみたいなと思います。

そしてさらに凄いことは、人間は、神様の「息」を与えられることによって「生きる者」となったと聖書は語るのです。神様は人間以外の他の被造物については、「言葉」をもって創造されました。動植物も、光さえもです。神の言葉は凄いです。しかし、人間の創造は「息」によって。この「息」は、神様のいのちと言って過言ではありません。息とは、呼吸ですね。呼吸が止むと、それは「死」です。私たちは当たり前のように息をしていますが、それは私たちを生かそうとしておられる方の息を、いのちを毎秒毎秒この体に頂いている、ということなのではないでしょうか？そうです、それほど迄に神様は私たちと「近い」。人間が“創造の冠”と言われる所以です。神様は人間に「園」を用意され、そこは正に、神と共にあることが何ら不自由なことではない楽園でした。このエデンの園の中央には二本の木が立っていました。命の木、そして善悪の知識の木です。園の中央に「命」があるのは分かります。しかしなぜ善悪を知る木もあったのか。それがなければ人は誘惑に陥ることもなかっただろうに。しかし、ボンヘッファーは、創世記講義の中でこのようなことを書いていました。命の木だけでなく、禁断の木もまた園の中央にあるというのは、人間はどこまでも被造物であるからだと。正しく被造物である時、人間は善悪そのものを超えた自由の中で生きていると。人は「命」だけではない、「被造性」つまり「限界性」を身に帯びているのです。それがむしろ大事なのです。人間は神の前に限界を持つ、そういう立ち位置。そして、その被造性が揺らぐのは、（再来週その箇所を見ますが）「神は本当にそう言われたのですか」という、私たちが神の裏側に入り込み、神の審判者になろうとする時だと言うのです。悲しいかな、私たちは既にそのようになってしまいました。そこから人間の中に分裂、あのパウロが言ったように“自分のしたい善はそれを欲せず、したくない悪を行ってしまう”という絶望と虚しさを抱え込む生の中に私たちは滑り落ちてしまいました。…しかし、そういう人間を神様は諦めません！人間を救おうとされます。人間は、まだ神様の息を呼吸できるのです！そのように造られているのです。

[2]　ぷはっと息継ぎをしよう！

先日もご紹介した沼田和也牧師の文章をご紹介したいのですが、王子にある小さな教会の牧師ですが、自分の居場所を見出せず、自らに絶望したような方々が集まりやすい教会になっているようです。それは先生が一時閉鎖病棟に入院するほど心を病んだ経験があるからなのでしょう。『街の牧師―祈りといのち―』の「自分を責めてしまうことからの回復」という所から少し紹介させて下さい。

「わたしの働いている教会では、日曜日の他に毎週金曜日の夜 7時から「聖書を読む会」をしている。日常の中に深く深く潜っている人が、これらの集会にいわば浮上して、息継ぎをする。わたしは潜水と浮上とをイメージしながら、これらの集会を執り行っている。中学生時代、水泳部にいたわたしはよく潜水をした。どこまで息継ぎせず泳げるかやっているうちに、 25メートルプールの端から端まで泳げるようになり、やがては往復できるまでになった。プ—ルの底ぎりぎりを滑るように泳いでいると、それほど深くなくても水圧はかなりある。プールの端が見えてくるころには、息が限界に近づいている。プール端のコンクリートに手が触れた瞬間、ぷはっと顔を上げるのだ。その爽快さたるや！日常の重みという水圧からせめてこの時は、ぷはっと解放されて欲しい。…日曜日の礼拝はしんどくて起きられない人は参加することができない。そういう人のために金曜日の集会は夜7時からやっている。わたしがする聖書の話は30分もない。あとは9時位まで、話が盛り上がれば 10時を過ぎてなお、そこに集まった数人の人々と茶菓を飲食しつつ語りあう。即興の会話が苦手な人は、ただ黙ってそこに座っていてもいい。聖書を読むという行為の中には、聖書そのものを読むという直接的な意味以外に、出席した人々との何げない会話も含まれているとわたしは考えている。聖書は死者たちが残した古文書として完結しているのではなく、わたしにとって彼ら彼女らと会話をすることは書かれた聖書の続きを読むことである。…他人から暴言を浴び続け、自己否定を内面化している人は、自己をとりまく世界の圧に耐えながら潜水を続けている。息継ぎをしようにも、浮上すべきポイントが見つからない。いや、浮上とは言うが、その人にはどの方向が上なのか分からず、ますます深く潜りこんでしまい、その強い圧でもっておのが全身を絞めあげているのかもしれない。そういう人に「こちらが上ですよ、ほら、浮上して息継ぎをしませんか」と声をかけるのがわたしの仕事であるともいえる。自己否定はそう簡単に癒されるほど根が浅くはない。その人はほんのひととき息継ぎをしたら、また自己否定の水圧へと潜ってゆくだろう。とはいえ、とにかく息継ぎという行為は知ったのだ。息が苦しくなれば、またこちらへと浮上してくればよい。そしてわたしやそこに居合わせた人々と話をすればよいのだ。自己否定はいつの日か減圧され、その深みは浅くなって行くにちがいない。わたしはそう信じて他人と関わっている。聖書において、神の霊を表すヘブライ語もギリシャ語も、元来の意味として「吹くこと」という意味がある。それは戸外であれば風であろう。そして、自分の体内であれば呼吸である。古代の人々は呼吸が止まれぱ死とみなした。息すなわち霊が、神のもとへと帰っていったと考えたのである。霊は、神から人間の身体へと与えられ、命の風となる。死んで呼吸が止まれば、息として体内に吹いていた風は、再び神のもとへと還ってゆく。教会の信仰はこのように息と深い関係にある。息も絶え絶えになっている人が、教会で霊を深呼吸する。この息継ぎをとおして、その人が再び生活圈へと潜っていく力を得ることができるなら。教会に働く者としてこれほどうれしいことはない。」

　今日も、この私たちの真ん中に主イエスがいて下さいます。その方は、いま私たち一人一人に「聖霊を受けよ」と息を吹きかけて下さっていると私は信じます。自分内側で、又は他人との関わりの中で窒息しないで息をしましょう。上を仰ぎましょう。神様の大きさ、イエス様の優しさの中で自分を取り戻させて頂きたいと思います。 お祈り致します。…主なる神様、あなたは私たちをあなたの楽園で生きるように造って下さいました。その楽園に私たちを戻して下さい。私たちは罪人ですが、なおあなたの愛の中で呼吸することが出来ます。この地上の歩みは厳しさが依然ありますが、肉体をお取りになった主イエス様が私たちの苦しみを担いながら共に歩んで下さることを信じます。どうか呼吸困難に陥る私たちにあなたの命の息を注いで下さい。主イエスのお名前によって。アーメン。